

模擬授業研究会の斉藤メモ(2019年11月28日)

授業者：〇〇

範囲：メディアリテラシーと世論

主な感想・代案

- テンポよく授業が進んでいきました。生徒とのやり取りの瞬発力のある対応や、板書を書くスピードなど、いずれも慣れているのか、もともと得意なのか、いずれにしても良いなと思いました。
 - 授業の流れが一見スムーズに見えた一方で、展開部での核となる問いが何だったのかがいまいちかりにくくなっているように感じます。生徒に腰を落ち着けて考えさせるタイミングを設ける上でも、主発問と補助発問との関係は重要だと思います。
 - 安倍総理に対する印象を聞いた質問などは、ある意味非常に政治的な質問のように感じました。特定の総理をよい印象で評価する場合、もう少し配慮が必要な気もしました。
 - 今回の授業が、生徒に新聞の読み取りをする力をつけさせたい授業なのだとすれば、やや教師がネタバレというか、自分で話しすぎな印象がありました。そういう意味では、一つ目の新聞比較は、タイトルの違いが分かるという点でインパクトがあるものの、二つ目の新聞比較はもう少し資料を読んで、その背景を生徒に考えさせるような展開が良いように思います。
- ⇒ 例えば私であれば、何らかのトピックに関する資料を二つ読ませます。その際に何段階かの分析のプロセスを用意します。そうしないと新聞をじっくりと比較しながら読み取るのは中学生には難しいと思うからです。第一段階は、それぞれの文章で重要な主張だと思う点を抜き出す。第二段階は、両者の意見の違いを説明する。第三段階は、なぜそのような違いがあるのかを説明する。こういったプロセスを意識させた形で資料を考察していけば、技能としての力も付くし、少し違う文章を同じプロセスで分析させたり、定期試験に出すこともできると思います。
- この授業では、新聞分析をした後の流れこそが大切だと思います。前半で Twitter のことを扱っていたこともあり、展開で新聞のことだけを扱ってはバランスが取れないところもある気がします。今後の生徒がどうすべきかという点に関して、もう少し考えさせる場面を取りたい。
- 例えば私なら、新聞社の記事の違いだけでなく、メディアの種類ごとでの特徴についてもう少しだけ踏み込むかも知れません。例えば、新聞、テレビ、Twitter、自身のホームページの四つを見ても、それぞれに載っている情報の質は異なります。これらを「詳しいかどうか?」「偏りがあるか?」などに視点から比較させ、生徒にバランスよい情報収集をするように促す場面があると良い気がします。懸念されるのは SNS で偏った情報ばかりを目にするようになることでもあります。

【コラム】理論と実践の接点

この社会はメディアの言説で構成されている。私たちの思考や知識すら、メディアの言説によって支配されていると言えるかもしれません。このような傾向はソーシャルメディアの時代に勢いを増しています。ただ、こういうことは建前では言えても、実感が湧くわけでは必ずしもありません。「メディア解釈学習」という考え方を提案している松岡靖によれば、メディア社会を解釈するためには、「メディア社会の枠組みの解釈」（つまり私たちの周りのメディアの特徴や背景に気づくこと）と共に、「メディア社会の新たな解釈の構築」（つまり自分たちで新しいメディア・情報を作成すること）の二点が重要だと論じています。やはり、何事も自分で作って見ないとその偏りが生じてしまうことも実感できないということかもしれません。野澤君の授業にそういう要素を加えられる可能性はあるかもしれません。

【参考文献】松岡靖(2010)『「メディア解釈学習」による小学校情報産業の開発』『社会系教科教育学研究』第22号, pp.131-140.